

国立台湾大学 留学体験記

医学部 6 年 宮本大智 | 留学期間 : 2026/06/20～2026/07/18

1 始めに

私は 2026/06/20～2026/07/18 の約一か月間、国立台湾大学に留学しました。留学中に私が経験したことや感じたことなどをまとめているので、留学のイメージを掴んでいただければ幸いです。

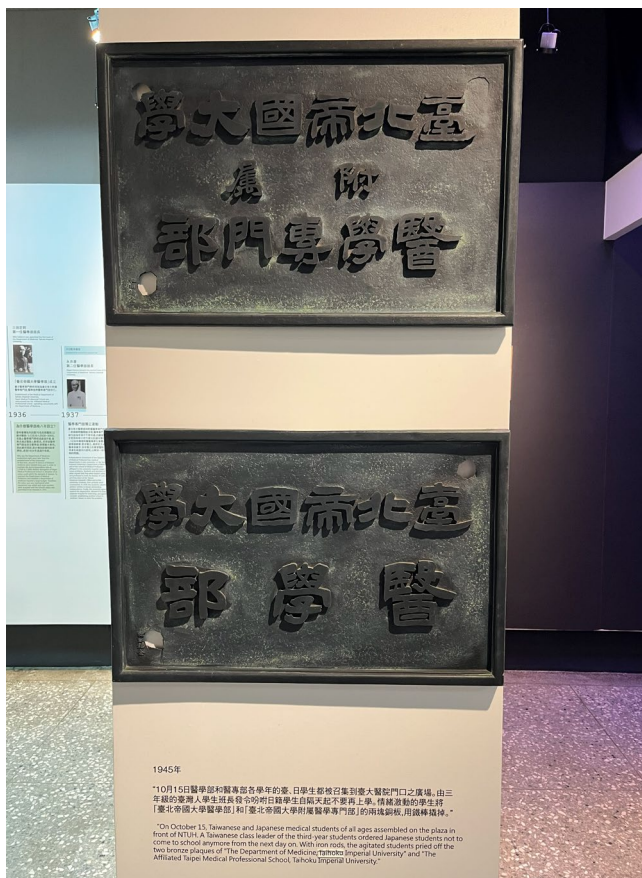
■ 福島県立医科大学と国立台湾大学の繋がり

初めに国立台湾大学と福島県立医科大学の繋がりについて話したいと思います。両者を繋ぐ人物は後藤新平です。後藤新平は、明治初期に現在の福島県須賀川市にあった須賀川医学校（福島県立医科大学の源流・前身）に入学し、近代医学を修めました。ここで医師としての基礎を築いたことが、彼のその後の衛生官僚・政治家としてのキャリアの出発点となりました。その後、台湾総督府の民政長官に就任した後藤は、自身が医師出身である強みを活かし、台湾の公衆衛生改善と医療人材の育成に乗り出します。その一環として、1899 年に創設したのが台湾総督府医学校（現在の国立台湾大学医学院・医学部の前身）です。

国立台湾大学の変遷

- **1897 年:** 台北病院内に「医学講習所」が設置
- **1899 年:** 「台湾総督府医学校」として正式に開校
- **1919 年:** 「台湾総督府医学専門学校」へ改称
- **1927 年:** 「台北医学専門学校」へ改称
- **1936 年:** 台北帝国大学に医学部が設置されたことに伴い、同大に組み込まれる
- **戦後:** 現在の国立台湾大学医学院（および台湾大学医学部付設病院）へと引き継がれる

このような繋がりが両校にはあり、2022 年 6 月に開催された「福島県近代医学教育 150 年顕彰記念シンポジウム」を契機に、同年 12 月 29 日に福島県立医科大学と国立台湾大学医学院の間で正式な学術交流協定が締結されました。この協定に基づき、今回私が参加した医学部生の相互留学プログラム（交換留学）や共同研究プロジェクト、災害医療に関する研究会などが活発に行われるようになりました。



2 留学の目的と活動内容

■ 目的

台湾留学における私の目的は、世界的にも先を行く台湾の医療 DX の実態を現場で見ることと、他国の医師・医学生の医療に対しての考え方や姿勢を学びに行くことでした。台湾では、初代デジタル担当相として知られるオードリー・タン氏がコロナ禍において独自のマスク在庫管理システムを構築し世界に先駆

け新型コロナウイルスの抑え込みに成功したなど医療分野における DX 化が進んでいることを知っていたためどのようなシステムが構築されているか非常に楽しみでした。また、日本の医師や医学生しか知らなかった私は他国の医師や医学生がどのような思いや視点をもって医学や医療に取り組んでいるのかに非常に興味がありました。

■ 活動内容

台湾大学では、2026/06/20～2026/07/18 の全 4 週間の内一般外科 2 週間と心臓血管外科 2 週間を回り外来や病棟、処置や手術見学の他、様々なカンファレンスや授業への参加をしてその中で英語でのスピーチも行いました。また、仕事終わりには会食に連れて行ってもらい多くの先生方や医学生達と交流することが出来ました。



3 経験と学び

医学生の段階での留学では専門的な知識の獲得は重要なことではありますが、より重要で留学の意義として主眼に置かれるべきは、母国語以外を用いたコミュニケーションへの挑戦・各国が持つ独自の風土や文化とそれによって育まれた人々についての理解・他国で得た知見を基に自国や自分の在り方を相対化して見つめ直すことだと今回の留学を通して強く感じました。そこで今回私が留学を通して得た経験と学びについて紹介します。

台湾の医療 DX について

- **健保カードとクラウド共有:** 患者の健保カード（IC カード）を読み込むと、医師は他の病院での検査結果（血液、画像データなど）や処方薬をクラウドで確認できます。無駄な検査や薬の重複を防げるので、現場では大助かりだそうです。

- **患者向けアプリ（健康存摺）:** 患者自身も公式アプリを使い、スマホで自分の過去の受診歴や検査結果を簡単に確認できます。

※**政府によるカルテ管理の実態:** 実はすべてのカルテを国が管理しているわけではありません。医師の細かなメモなどは各病院のシステムで管理し、検査結果（血液、画像データなど）や処方薬などの重要データを国のプラットフォームで共有しているのが実態です。

■ 世界共通の医師としての姿勢

現地の医師や医学生と接してみて感じたことは、医療や医学に対する姿勢は日本と台湾どちらの国においても同じだということです。日本での実習中に接した大学や市中の病院で印象に残っている医師と台湾でお世話になった先生方の姿は重なる所が多く、医療に使命感を持って懸命に、それでいて楽しく仕事に取り組まれていました。特に、今回外科をメインに回っていて感じたのが、外科医の多忙さには目を見張るものがあり、文字通り一分一秒の休息なしに仕事をこなされていました。朝のカンファレンスから始まり、外来や処置、エコー等の検査、手術を数件、移動の合間にオンラインでの会議に参加したり学術論文についての作業をしたりなどその仕事ぶりには本当に尊敬の念を抱きました。このような多忙の中であっても疲れた様子など微塵も見せずに仕事を正確にこなしていき仕事が終わると皆で夕食を食べに行くというエネルギーでパワフルな姿に憧れ、自分もこのような医師になりたいと強く思いました。今回の留学を通して、自分が憧れを抱く医師達には国の違いは関係なく医師という職業に対する共通した姿勢や信念があることを実感しました。様々な機会に自分はなぜ医師になろうと思ったのか、医師としての理想像は何なのかについて再考することは医師としての人生を歩む上でとても大切だと思います。

■ 現地で得た繋がりや文化への尊重

留学で得られたものは台湾の医療知識や経験だけではなく、現地の人々との繋がりでした。私は、留学期間中に医師や医学生、医療スタッフの方々など様々な人と知り合うことができました。彼らから台湾の有名なお店や観光地、歴史や文化、台湾の徴兵制とそれを考慮した人生設計など本当に様々なことを教えて頂きました。自分で調べた台湾の知識と現地の人から直接聞く生の声ではその深さや重みが全く違い、台湾の歴史や文化についての誇りを感じることができ台湾の文化に対する尊敬の念を自然と持つようになりました。また、台湾の方々は日本の歴史や文化に対して非常に好感を持っている人が多く改めて日本文化の大切さにも気付かされました。各国が持つ歴史や文化の大切さとそれぞれの国がお互いの歴史や文化に対する敬意の念を持つことの重要性を実感できたことは今回の留学で得た大きなものの一つです。また、美味しいお店や海、山、現地の人しか知らない絶景スポットなど様々な場所に連れて行って貰いとても充実した毎日を送ることができました。世界のどこかに友人ができると自分の中の世界が広がり、その国に対してより愛着が湧くようになります。台湾の友人とは留学後も連絡を取り続けており、現地でできた思い出と繋がりこそが留学において一番の財産だと思います。



4 困難と克服

留学中における一番の困難はやはり言語の壁でした。台湾では台湾華語と英語が主に用いられていますが、母国語ではない英語についても、台湾大学の人は勿論のこと街の人もある程度話せる人が多い印象でした。ここは日本と大きく違う点だと実感しました。これには政府による英語教育の違いが関係しているようで日本の学生と台湾の学生では英語にかける勉強時間が圧倒的に違い台湾では小学生の頃から英語教

育が取り入れられており英会話クラスがどの学校でも早期に取り入れられているようです。このような中で普段から英語を喋る機会がない私は最初の頃は英語でコミュニケーションをとることに困難さを感じ躊躇していました。しかし、現地での生活を送る中でこれを克服する一番の方法を実感しました。これはよく言われていることですが、現地で親しい人を作ることです。前述の通り私は出逢いに恵まれ、現地で親しい友人を作ることができ平日の夜や土日などはその友人と一緒に様々な所へ出かけました。友人として接するため堅苦しさや英語表現のミスなどを気にすることなく、普段日本での友人とするような冗談を言い合ったり、他愛もない話をしたりなどフランクに英語で会話していました。すると自然と英会話が出来るようになりました。また、台湾華語についてもたくさん教えてもらいました。自身で勉強して学ぶ知識よりも現地の友人と会話しながら学んだ知識の方がより実践的絵定着のスピードも違うことを強く実感しました。

【余談】台湾のイングリッシュネーム文化

- ・国際的な貿易都市である台湾にはイングリッシュネーム（English Name）というものがあり、自国での名前が英語圏の人にとって発音しづらい・聞き取りにくい場合に海外でのみ使用する自分の英語名を持つ文化があります。
- ・本名と似た発音や、英語学習・授業で使った名前をそのまま使うなどの方法で付ける場合が多いそうです。

5 今後の展望

今回の留学を通して、本当に多くのことを経験し学ぶことができました。留学の前後で、自分の中にある価値観や世界の見え方が大きく変わり、今後自分が目指していく医師としての在り方が明確になったような気がします。日本を始め世界には病気で苦しむ人達が多くいます。住んでいる風土や文化が違えど全人類に共通することは、人間が豊かに楽しく人生を送るためには何をするにしても健康が欠かせないということです。私は今回の留学で台湾の文化、そして日本の文化がより一層好きになりました。それら文化を支えるのは人であり人の基盤となるのが心身の健康です。そしてそれを支えるのが医療です。私は、医師としての責務を学生生活の最後に再確認することができました。今回の経験を糧に、医療を必要としている人達に対し医師として最大限貢献していこうと思います。



【謝辞】

このたび、国立台湾大学での貴重な学びの機会をいただき、多くの方々のご協力を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。

国立台湾大学

外科部 郭庭均先生

心臓血管外科 胡思彦先生

福島県立医科大学

福島県立医科大学薬理学講座 下村健寿教授

糖尿病内分泌代謝内科 島袋充生教授

国際交流センター 嶋本雅子様

企画財務課 増井奈津美様

また、台湾留学中にお世話になったすべての方々に心より感謝申し上げます。